



在住外国人インタビュー

ポーリン ケント氏

Pauline Kent

- 1986 千葉大学文学部行動科学科卒業
- 1989 大阪大学大学院人間科学研究科博士後期課程退学、学術修士
- 1989 国際日本文化研究センター研究部助手
- 1996 龍谷大学国際文化学部助教授

前号より始まった『在住外国人インタビュー』第2回の今回は、『世界の中の日本型システム』や『日本人の行動パターン』などを共著され、様々な角度から日本を鋭く研究されている龍谷大学国際文化学部助教授 ポーリン ケント氏（オーストラリア・キャンベラ出身）に大学の研究室にてインタビューさせていただ

■早速なんですが、先生の来日のきっかけをお話ください。

私の場合は、いわゆる大義名分にあたるものがないの。出身地のキャンベラで小学6年の時に「大使館で日本語を教えてもらえるよ」というので、日本語を習い始めたんです。歌を歌ったり、簡単な漢字を学ぶ程度だったんですが、それが中学まで続いたんです。日本に関心なんてなかったけど、ただ「せっかくの機会だから」というので続けたんです。ジュニアカレッジに進学し日本語をやりましたが、でも何も覚えてない(笑)。ジュニアカレッジ(日本の高校)の2年を終ってから、日豪協会の交換留学生として熊本にやってきたんです。

■日本に対する知識は…。

ほとんど無かった。だから日本に着いたらビックリ！ 第一熊本は方言がきつくて私の習った日本語なんて全然通じない。だって「～ばってん。ばってんって何??？」(笑)。熊本での1年間は、授業も全然分からず、国語の先生から「辞書で、漢字を一から学びなさい」と言われ、一生懸命がんばって少しは漢字を覚えました。1年が終わる頃やっと耳が慣れて、少しは会話ができるようになったら、ジ・エンドでした。

留学したことで日本への関心が高まってたので、帰国後大学ではアジアスタディーズという学部に入り、日本語や歴史を学びました。たまたま“文部省の留学プログラム”を見て受験したら、受かってしまって、で、5年間のカリキュラムで日本に来たんです。そして、そのまま居着いてしまった(笑)。

■外国での日本のイメージは侍や芸者からどう変わりましたか。

今はソニー、ウォークマン、ゲーム、コンピューターとか、そういうイメージです。オーストラリアの場合、日本は貿易等で輸出相手国一位ですし、輸入もトップ群に入ってるはずですよ。

■先生の熊本時代からすると今の日本は随分変わったと思うんですが。

すごく変わりましたね、環境や社会的なこと、それに食生活も変わってしまいました。例えばファッション。来日当時、私はオーストラリア人だから、暑い時期に短パンとか、ノースリーブを着るんですが、日本でそのような格好をすると白い目で見られ、「ナマアシ」なんてタブーでした(笑)。今の

若い子はそれよりすごい。

それと今の子どもたちは忙しすぎます。通塾率も高いし、夜の9時や10時に電車で塾通いの子どもを見かけますが可哀想に思います。オーストラリアの子は今でも早く寝て、一人で電車に乗って遠くに行ったり、遠い塾に通うなんて考えられない。ましてコンビニで夕食の買い食いなんて…。食生活も随分変わってしまいましたね。子どもたちの集中力は確実に落ちていて、なんでもかんでも「しんどい」と言う。アトピーの子が増え、確実に社会と環境が変わっている。生活パターンの急変に人間合わなくなって…。「忙しい、忙しい」で、旬を楽しむこともなくなり、季節を楽しむことも、旬がいつかすらも分からなくなってる。

■ご専門の社会学、比較文化という観点から、日本とオーストラリアとの一番の大きな違いはどのようなところだとお考えですか。

難しい質問。一つは、時間の使い方。「余裕が無い」ことです。オーストラリアから日本に戻ると、とにかくみんなの足がものすごく速く動いているのを感じますね。何をしてもペースがすごく速いんです。「すぐやらないといけない、すぐ、すぐ…」なんです。日本人にはもうちょっと「ゆっくりポーっとする時間」が必要。余裕が無さすぎます。

自分の時間や、休暇・余暇の使い方も下手。さっきの子育てにもちょっと関係するけど、オーストラリアでは、小学生

